

博物館に収蔵された鳥類標本は、研究のみならず「芸術」にも大きく貢献しています。今回の「標本資料の活かし方」のコーナーでは、鳥類標本と彫刻家である岩橋徹さんの関わりについて紹介します。

岩橋徹さんは、バードカービングという鳥を題材とした彫刻の全日本チャンピオンです。国内のコンクールにおいて、これまでに8回も優勝されています。岩橋さんの作品の特徴は「躍動感」です。タカが獲物を捕る鋭い動き、親鳥がヒナへ餌を与える様子など、鳥たちの一瞬の動きを見事に表現しています（写真1）。今にも動き出しそうな作品の数々は、まさに芸術品です。そして、これらの芸術品を生み出す一助となっているのが博物館の鳥類標本です。岩橋さんは、一つの作品を仕上げるまでに必ず博物館を訪れ、鳥たちの形状や色彩の変化を細部にわたり観察されます。例えば、鳥たちの形状については、頭部から指先のツメまで実に約70カ所も計測し、細部の形まで徹底的に把握します（写真2）。もちろん、計測は1mm単位です。また、色彩の変化については、標本の羽根を一枚ずつ丁寧に観察することで、その全貌をひもといていきます。

岩橋さんは、上記の情報をもとに「本物の鳥」と同じ形・色を再現し、彼らの動きを見事に描写します。鳥類標本から採取した緻密な情報が、作品の「躍動感」の源となっているのです。

布野 隆之（自然・環境マネジメント研究部）

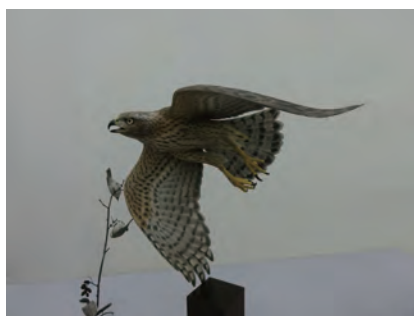


写真1 獲物を追うオオタカの幼鳥。

力強く打ち下ろした左翼の先端は大きく湾曲する。獲物との距離を一気に詰めると共に、右方向への推進力を得ている。



写真2 鳥類標本を計測する岩橋徹さん。

鳥類標本の計測は、1個体につき約70カ所。計測後、嘴や足、羽根の形態を観察し写真に記録する。

## トピックス

## わたしのひとはく活用術

## ひとはくを活用して活躍する地域研究員

ひとはくは「地域を愛する心を育み、地域の自然・環境・文化を未来へ継承する」を理念に掲げ、自然・環境・文化を解き明かし、多くの人に魅力を伝える活動を進めています。2004年からは、ひとはくの上記の理念に賛同してくださる個人や団体と協働して調査研究・普及啓発活動を展開する地域研究員制度を設けています。県下各地で活動する地域研究員・連携活動グループのみなさんは、毎年開催される「共生のひろば」にて活動を発表したり、

ひとはくと共催でセミナーや展示、イベントを実施したりしています。ひとはくの植物標本などを活用して植物のありのままの姿を細密に描く植物画に取り組む方、生きものの微細構造を観察しやすくするためのレプリカ作成法の開発に取り組む方、人形劇や自然観察会、剥製標本のハンズオンなどを活用して、野生動物の魅力を伝えるグループなど、多くの人々が多彩な活動に取り組んでいます。研究や地域活動で支援をお求めの方は、是非、ひとはくにご相談ください。

橋本 佳延（自然・環境再生研究部）

ひとはく通信

# ハーモニ

103

Dec. 2018

特集

標本のミカタ

〜 収蔵資料の価値 〜

第2回標本のミカタ「イカタコエビカニ！」より  
カニカニブラザーズによる講義